

---

# マリオ&ルイージRPG 兄弟の冒険日誌。

美怜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マリオ&ルイージRPG 兄弟の冒険日誌。

### 【Nコード】

N3716M

### 【作者名】

美怜

### 【あらすじ】

ある日キノコ王国に訪れたのは、隣国・マメーリア王国からの親善大使。

しかし彼らは、玉座の間で王国を納める姫君・ピーチ姫を襲い、声を奪い取ってしまう！

今こそ、マリオ・ルイージ兄弟の出番。

ふたりがつけた冒険日誌を、読んでみませんか？

## プロローグ 謎の親善大使。

「マメーリア王国より、親善大使のご到着です」

今日も平和なキノコ王国。

お城の上に、ぼんぼんと花火が上がる。

キノピオが奏でるファンファーレと共に、玉座の前に現れたのは、黄色い服を着た二人組。

彼らは、やがて王国を納める美しい姫君の前にたどり着く。

優しいな微笑みを浮かべてそこに佇む彼女の前で、ローブを着た老人が、恭しく頭を下げた。

「キノコ王国の発展とマメーリア王国との親交を願い、マメラ女王から贈り物で御座います」

しわがれた老婆の声に続き、後ろに控えていた背の小さい男が、自分の身長ほどもある巨大な宝箱を持って前に歩み出て、姫君の前にそれを差し出す。

差し出された宝箱を受け取るべく、姫君が男に近づいた……その瞬間。

宝箱の蓋がひとりでに開き、その中からバネのついた不細工な人形が飛び出して。

その人形の口に当たる部分から、緑色の不気味な気体が、姫君の顔目がけて勢いよく吹き出したではないか！

会場内が一気に騒然となる。

その中でただ一人、愉快そうな笑い声を立てた老婆は、今まで身につけていた黄色い服を脱ぎ捨てて。その下からは、黒と紫を基調にした服をまとった姿が現れて。

彼女が勢い良く両手を掲げると、彼女の周囲には、彼女に導かれるように紫色の雷が次々と落ちる。恐れおののき、その場にいた姫君の従者たちは、全員が一目散にその場から逃げだした。

やがて、箱を持っていた小男も服を脱ぐ。服の下には赤いマントを着こんでいた。と、どこからともなく、掃除機のノズルを取り付けたような機械的なデザインのヘルメットがあらわれ、それは男の頭にすっぽりと収まる。

掃除機のノズル部分が動き出し、姫君の周りにもうもうと立ち込めていた気体を吸い取り始める。気体がなくなると、今までせき込んでいた姫君が、やがてばったりとその場に倒れこむ。

その姿を見降ろし、二人は再びげらげらと笑いだすのだった……。

【 マリオ & ルイージ R P G

兄弟の冒険日誌

】

## プロローグ 謎の親善大使。（後書き）

と、いうわけで。

初めまして？とこんにちは。

G B Aで発売された、初代マリオ&ルイージRPGを、ふたりの語る日記風ノベライズでお送りしていこうと思います。

プロローグは第3者の視点ですが……

自作からは、マリオとルイージが代わりばんこで物語をたどっていく形式になります。

ふたりの愉快的な冒険記を、どうぞお楽しみ下さい！

## 第1話 平和はいきなり破られた。

【Mario Side】

最近、妙にクツパの野郎が大人しい。

今日も相変わらず天気はいいし、姫も町の人も優しいし、湯加減最高だし。厄介なことが何も起こらない毎日ってのがこれほど穏やかだったなんて、ちょっと前までの俺たちには想像もつかなかったことだな。うーん、平和だあ。

今ごろ、庭で俺の服を洗濯しているだろう俺の双子の弟・ルイージの姿を思い浮かべながら、俺・マリオは朝風呂を楽しんでいた。

……おい誰だ、『オヤジ臭い』なんて言ってる失礼な奴は！

うーん、これほど気持ちいいと、思わずムーディーに鼻歌を口ずさんでしまうなあ。

「ららら、ふふふーん」

「き、き、緊急事態です！」

「ん？」

いきなり、開け放った窓の外から、甲高い叫び声が聞こえてきて何だろうと思い、俺はちらりとそっちに目を向けた。

声の主は、城にいるキノピオのひとりだった。洗濯ものを干している途中のルイージと向かい合っている。凄く慌ててるな。……いつもの事だが。

「臨時ニュースはもう聞きましたか！？」

「臨時ニュース？ ううん、何かあったの？ ……って、うわあ！」

返答を聞いてすぐ、ルイージを思いっきり突き飛ばして、キノピオは家の中に入ってきた。「マリオさーんっ！ー」と、さっきより甲高い、耳に直接響きそうな叫び声と共に。

え、鍵はかけてないのかって？ ふふん、うちだけじゃなく、他の家もいっつも鍵はかけないぜ。何故なら！ このキノコ城下町には、空き巣をするような悪党はただのひとりもないからさ。これも全部姫のおかげだなあ。

と、まあそれはともかく。こいつはきつとただ事じゃないよな、  
と思い、俺はバスタブから立ち上がった。……と、同時に。

「きゃあー！ーっ！！」

もうもうと立ち込める湯気の向こうで、今までで一番高い叫び声  
……というか、悲鳴が響いた。

……あ、ヤベ。そういや、暑いからって風呂場のドア開けっぱな  
しだった。ルイージに「兄さん、はしたないよ！」って怒られそう  
だなー。

慌てて俺は外に出た。……おっと、素っ裸はまずいからせめてパ  
ンツだけでもはかないとな。はー、せっかく気持ちよかったのに。  
体を拭くのもそこそこにリビングに出てみると、そこには顔を真  
っ赤にしたキノピオが倒れていた。あーあ、茹でダコならぬ茹でキ  
ノコになっちゃって。

俺はいつもより力を抑えるようにジャンプして、キノピオの頭を  
軽く小突いた。

「おーい、大丈夫かー」

「ピ、ピーチ……姫。ピーチ姫……が」

「何！？ 姫になんかあったのか！？」

「……きゅう」

大事なところで、のぼせきつたキノピオはとうとう目を回してし  
まった。

……直接城に行くしかないか。俺は急いで家の外に向かって走り  
出した。

「に、兄さん！？ パンツ一丁で何してんの！ って言うか、今キ  
ノピオが……」

「分かってる！ ルイージ、とりあえず服返せー！」

「何言ってるんだよ、今干したばかり……って、うわあああ、絡ま  
ってるってばー！！」

洗濯紐にぶら下がってたのを無理やり着ようとしたせいか、俺の体には不格好に絡まったロープが。……そして、服と一緒にルイージも絡まってる。

「あーもう、ほどくの面倒だからそのままついて来い!!」

「ええええ、そんなあゝ!!」

ルイージを引きずりながら、俺は城に向かって一目散に走り出す。今、参ります。安心して待っていて下さい、ピーチ姫!!

緊急事態だからか、それとも平和ボケしすぎているからか。こんなときでも、城内は相変わらずのザル警備。キノピオ兵士の姿はほとんど見かけない。それ程城下町が平和な証拠だが……何度もさらわれてるし、今回もそうなるかもしれないってんだからいい加減学習しろよこいつらはっ!

そんな心のツツコミと共に、ようやくたどり着いた玉座の間。ためらいなく、俺は門を一気に開け放って、玉座の間に駆け込んだ。

……やっぱり!

何故か、涙を滝のように流して泣いている姫の前にいたのは、紛れもなく!

姫をさらい、他国の重要な宝物を盗み、そして俺たちに散々ちよつかいを出し続けてきた、大魔王クッパその人(いや、亀か?)だったんだ。

立ち止まるためにブレーキをかける。俺はどうにかクッパの前で止まれたが、ルイージはブレーキの勢いでそのまま前に向かってつんのめって、クッパの背中に思いつきり激突する。その勢いでクッパも床に倒れる。……あ、紐ほどけた。それはそれでラッキー?

起き上ったクッパが振り返る。ルイージが慌てて俺の陰に逃げ込んだ。……うわー、すっげー怒ってる。

「ンガアゝゝッ!! この大変な時に、またお前たちかつ!!」

「あ? そいつはこっちのセリフだぜ、よくも俺のバスタイムを邪魔してくれたな!」



「しかも我輩に不意打ちとは卑怯者め！」  
いや話聞け。

あーもう。そっちはそっちで怒ってるが、こっちはもっと怒ってるんだからな！！

「ま、マリオさん！ 久しぶりのバトルですね…… 大丈夫ですか？」  
いや、お前もこんな時に何言ってるんだよ。こちとらこれから戦おうってのに！

まあ……体がなまってるってのは否定しないが。

「あー…… 大丈夫大丈夫。心配なくていいから、何も言わなくていいぞ。すぐ片付けるからさ！」

「そ、そうですか。さすがマリオさん！」

俺の言葉にそう返してきたキノピオの顔は、どこか複雑そうだった。……説明したかったのか？

「……キノピオたちって、ほんとと兄さんに頼りすぎてるよねえ」  
ぽつりと、冷静さを取り戻したらしいルイージが呟く。うん、俺もそろそろそう思い始めてた……かも。

どうやら、体がなまっているのはお互い様だったらしい。

「グ……グゲツ……」

数発目のジャンプ攻撃で、その巨体はあえなく崩れ落ちた。ふふん、ざまあみろ。

……と、思ったら。クッパがいきなり、今まで受けたダメージが嘘のように、勢いよく起き上った！

「うわ、起きた！」

「まだやるってのか、この野郎！」

「ちょ、ちよつと待て！」

戦闘態勢をとろうとした俺を、クッパが押しとどめる。

「こんな事をしている場合ではないぞ！」

「……え？」

「い、いきなり何言ってるんだよ、そっちから仕掛けてきたくせ

に！」

「皆さん！！」

今度はキノピオが声をあげた。

……どうやらクッパが言ってるのは本当の事らしい。仕方なく、俺は戦闘態勢を解いた。

「大変なことになりました！ 先程、キノコ王国の隣のマメーリア王国から、親善大使がやって来たのです！」

「マメーリア……王国？」

行ったことはないが、姫から話くらいは聞いたことがあった。自然にあふれた、すごくきれいなところだつて。

そこから親善大使が来るってことは、お互いに仲のいい国っぽいな。

まあそんな雑学はどうでもいい。問題なのは、今の話だ。

「そ、それで……その人がどうしたの？」

「そ、そいつが……ピーチ姫の『声』を、奪い取ってしまったのです！」

「こ、『声』を……？」

そんな形のないもの、どうやって奪い取ると言っただろう。と、疑問が浮かびあがったとき。

今まで泣いていたピーチ姫が顔をあげて、口を開いたんだ。

……あれ？ 聞き取れない。なんて言っているか分からない……。つていうか、こんな喉が潰れたような汚い声、絶対いつもの姫の声じゃない！

いつもの姫は、もっと澄んだきれいな声をしているのに。

と思っていた、その時。

姫の口の中から、何か変な形をした黒い物体が飛び出して。

それは、重力に従って床に落ちた。と、同時に！ それは、勢いよく火を吹いて、爆発したんだ！

「うわっ！ なな、何！？」

「か、代わりに、姫の声がこのようなバクダン声に……」

「バクダン声って……おわあっ！！」

キノピオの説明の間にも、バクダン声はどんどん姫の口から発せられる。

雑音、爆音、轟音が、耳にびりびりと響いた。

「こんなピーチ姫をさらったら、我輩の城が壊れるじゃないか！」

「って、結局それが目的だったのかよっ！！」

「当然だ！ 何とかしろ、マリオ！！」

「な、何とかしろって言われても、声なんてどうすりゃ……」

失った声をもう一度復活させるなんて魔法使いみたいな真似、俺にもルイージにも出来るわけない。

と、なれば……。

「マリオさん！ ピーチ姫の美しい声を、取り戻してきて下さい！」

「犯人は、マメーリア王国からやって来ました。きっとマメーリア王国に行けば、何か分かるはずです」

そうだよな。

姫の声つてのが、どういう風にどんな形で盗まれた、というのは分からなくても、とりあえず声だけでも取り戻せれば、何とかなるかもしれない！

「よし、分かった！ よーし、久々の冒険だな！」

「留守番なら任せてね、兄さん。部屋はちゃんときれいにしておくから！ 頑張つて！」

「おう、任せとけ！」

「ガハハハハ！ だったらさっさと犯人捕まえて、ピーチ姫の声を戻すだけのことよ！ 我輩の『カメジエツト』を使えば、マメーリア王国までひとつ飛びだ！」

……うわ、着いてくる気だよこいつ。

何度も戦いあってるし、こいつと一緒に戦ったことも実際結構あるし、俺の目から見て強いのは確かだけど。……正直、姫のために

俺とこいつが協力するって言うのは、世間の目から見てどうなんだ？

「……えゝ。マジ？」

「なんだ、その嫌そうな顔は！」

「そりゃ、実際嫌なんじゃないの？」

「おお、言うようになったなあルイーシ」

「ええい、ごちゃごちゃ言うでない！！」

顔を真っ赤にして怒ってる。

意外と寂しがりなのか？ ……いや、こいつに限ってそんなことは。

俺たちに向きなおって、クツパはびしりと命令した。

「マリオ！ 出発の準備をしろ！！」

……その直後。

大量に発せられたバクダン声によって、玉座の間が半壊することになったのは……また別の話だ。

第1話 平和はいきなり破られた。 【Mario Side】（後書き）

実際にゲームをプレイし、台詞をメモしながら書き上げました。  
最初はマリオ視点です。

プレイ済みの方なら分かるかと思いますが、最初のマリオとキノピオのやりとり。鼻歌を歌うのとキノピオが風呂場に入るの、逆なんですな。

書いている途中で、何となくこっちのほうがつじつまが合うかな？

と思つて、ちよっぴり書きかえてみました。

こっちはこっちでいい……かな？

## 第2話 なりゆきの旅立ち。【Luigi Side】

突然決まってしまった、僕の双子の兄さん・マリオの旅立ち。

兄さん、いつも言ってるんだよねえ。「体をはって戦うのは俺だけでいい。お前は何も心配しなくていいから」ってさ。失礼だなあ、一応僕だつてちゃんと戦えるんだよ！……怖いけど、ね。

まあ、こんな話は今度でいいとして。僕、ルイージは、キノコ城の中にある滑走路の入り口で、兄さんを待っていたんだ。

本来なら、ここは姫の自家用機があるんだけど……今は、クッパのカメジェットに占領されてる。いつも乗ってるピエロみたいな船といい、クッパって……美的感覚あんまり良くないよね？

……あ、来た来た！ 兄さんだ。

「よう、ルイージ！」

城にいるキノピオたちに挨拶してきたらしい。旅立ちの準備もばつちりみたいだ。

「クッパ、もう滑走路のほうに行ってるよ」

「お、そうか。じゃあ早く行かないとな」

ふたたび滑走路のほうに向かって歩き出す。あ、ここにもキノピオたちがいるね。

兄さんの姿を見るや否や、嬉しそうに話しかけてきた。やっぱり兄さんは人気者だねえ。

「ついこの間、マメーリア王国に旅行をしてきたの。ウフフな山に、ゲラゲラな森に、クスクスな海にデヘヘな砂漠と、見どころ満載な国だったわ！」

「……何だそりゃ。訳分からん」

「ホントに自然にあふれた国なんだねえ」

「突っ込むところ違うだろ……」

「マリオ殿……！」

急に後ろから、ものすごい大声で話しかけられて。

びつくりして振り向くと、茶色いスニーカーに乗って、こつちに向かって全力疾走して来るキノピオの姿があった。

あれは……ピーチ姫に仕える大臣、キノじいだね。

僕たちの前で止まったキノじいは、乗っていたスニーカーから飛び降りて、「なんとか間に合ったようすな」って言って、どこかほっとしたように笑った。

「マリオ殿のために、長旅にもってこいのスニーカーを用意致しましたぞ！ アイテムや着替えが沢山入られて、とーっても便利！ 持って行って下され」

わあすごい！ きつと新品なんだろう、どこもかしこも磨いたみたいにピカピカだあ。

「おお、サンキュー！」

「よかったね、兄さん」

「さて、渡すものがもうひとつ。旅の資金として、これをどうぞ」  
えっ、まだあるの？ しかもお金？ わあ、さすがキノじい。姫の事となると、心配でたまらないんだね。姫は、なんだか迷惑そうにしてみたんだけど……。

キノじいが懷から、ずっしり重そうなコイン袋を、兄さんに手渡した。

「ひーふーみー……うわ、100コイン！？ こんなにいいのかよ」

「もちろんですとも、他ならぬ姫様のためですからな。……おや、

ルイージ殿。ルイージ殿もマメーリア王国へ行くのですかな？」

「えっ？」

うーん……

本音を言えば、僕も一緒に付いて行きたいんだけど。

あんまり戦い慣れてないし、兄さんに迷惑かけたくないなあ。

……ちよっぴり怖い、っていうのもあるんだけどね。

「いえ、僕は見送りです」

「おお、ならばジイと一緒にすな。マリオ殿！ 先に行って、カメジエットの前で待っておりますぞ」

「ああ」

兄さんに頷き返して、キノじいは滑走路のほうに向かって歩き出す。

「元気なじいさんだよなあ。姫の事となると余計にさ」

「それほど心配してるんだよ」

「そいつは俺だって同じだよ。こっちは心配なくていいから、留守番しっかりな」

「うん」

大きく僕は頷いた。

「マリオー!!」

滑走路の上に、どーんと陣取るカメジェット。

デッキのほうから、クツパの怒鳴り声が聞こえる。……もしかして、すつごく怒ってる？

「遅い!! 何してたんだ!!」

「仕方ないだろー、広場でキノピオたちに落し物探すの頼まれたりしててさあー!!」

兄さんが怒鳴り返す。僕が待つてる間、そんなことしてたんだあ。兄さんらしいや。

「出発するぞ! 早く乗れ!」

「あー、はいはい」

兄さんが、地面を蹴ってデッキに軽々と飛び乗った。

さっすが。このジャンプを見て僕たちだと分らない人はいないってぐらい、僕たちのジャンプは有名だからなあ。ジャンプ力だけなら僕でも結構あるんだけど、フォーメーションとかパワーは兄さんのほうが凄いや。

「どうだ、凄いだろう! これが我輩の最新兵器、カメジェットだ!!」

「んー、まあな。……実際にいつと戦うのは勘弁したいが」  
「ウム」



兄さん、それって褒めてるの……？

でも、クツパは満足そうに頷いてる。う、嬉しいんだ……。

やがてクツパは顔を上げて、お腹にずんと響くぐらいの大声で、号令をかけたんだ。

「あとは我輩の手下の……クツパ軍団、集合！！」

あ、そろそろ離陸するのかな？ 兄さん、行つてらっしゃーい。僕は帽子をとつて、兄さんたちに見えるようにぱたと振った。

……あれ、来ない。僕たちより先に来てたノコノコが一人いるだけだ。

迷つてるのかな？ この城、広いんだよね。僕も初めて来たときは……。

「んがー、どこ行つたー！！……ん？ ひよつとして、お前はクツパ軍団に入れて欲しいのか？」

「……え。マジ？」

兄さんが固まつてる。そりゃそうだよねえ、そんな奴一体どこに……

「そうかそうか！ そんなに連れて行つて欲しいのか！」

満面の笑みを浮かべてる。帽子を振つてる僕に向かって……え？ ……あれ？

「……僕？」

「そつだ！ お前だ！」

慌ててぶるぶると首を横に振った。僕、ただ見送りに来ただけなのにー！

「ガハハハ、遠慮はいらん！ 足を引っ張りそうだが、特別に連れて行つてやる！」

遠慮なんかしてないつてばー！！

これ、逃げたほうがいいよね……？ ……それっ！！

「こらー、待てー！！」

後ろからの怒鳴り声に聞こえないふりをして、僕は城門目掛けて一気に駆けだした！

……そしたら、同じようにこっちに向かって走ってくる団体を見つけて。

「うわあー!!」

「クッパ様！ 軍団ただいま到着しました！」

そのまま、思いつきり正面衝突して。あえなく、元いた場所にはじき返されてしまったんだ。

「おーい、集合場所はこっちだぞー!!」

先頭に立っていたノコノコに呼ばれて、他の軍団員たちがどんどん集まっていく。広場が軍団員でごったがえして、もう大騒ぎ。

……どさくさに紛れて、逃げられるかな？

と思つてたら……わー、カメジェットが追っかけてくるー!!

空飛ぶ戦艦相手じゃ、流石に競争には勝てない。

伸びてきたマジックハンドに捕まって、僕はあつという間にカメジェットの中に押し込められてしまったんだ。

あーあ、いったい何でこうなっちゃったんだろう。僕が悪いのかな？

……でも。

今度は兄さんと一緒に、見知らぬ国をあちこち旅できる。

そう思うと……

ちよつとだけ嬉しい、かな？

## 第2話 なりゆきの旅立ち。【Luigi Side】（後書き）

今回はルイージ視点でお送りしましたー。

ゲームでは、行きたくなかったルイージが無理やり連れて行かれた、という描写で描かれていて、多くのプレイヤーがここで笑ったことでしょう。

でも個人的には、ルイージがいつも留守番ばかりなのは、マリオなりの思いやりだったらしいなあ、と。

そして、ルイージもそれを分かっているうえで、ついて行きたかったんじゃないかなあ、と。

勝手な想像ですが、それを形にしたくて、今回の話はこういう形になりました。

いかがだったでしょうか？

### 第3話 犯人現る！【Mario Side】

あの大騒ぎから、どれだけ時間が経ったんだろう。

なりゆきでついて来ることになってしまったルイーヂを迎えに、俺は格納庫に来ていた。

「大丈夫か？」

「うつつ、何でこんなことに……」

「うわー、すっげえいじけてる。そんなについて来たくなかったのか？ それはそれで傷つくんだが……。まあ俺としては、血のつながつた双子の弟であるルイーヂをあまり危険な目には逢わせたくないかったわけで、結構複雑な気分なんだよなあ。」

とりあえず、仮にもスーパースターの弟が悪党の仲間入りなんて冗談じゃないし、本人も絶対嫌だろうし、クッパは後で説得しておこう。そう思った直後、天井に取り付けたスピーカーがぶるぶると震えだした。

『えー、艦内にいるマリオと……緑のヒゲ！』

スピーカーから聞こえてきたのは、クッパの手下が流す艦内放送だった。

『もうすぐマメーリアに到着だ！ 荷物を整理したら、速やかにデッキまで来るように！』

「緑のヒゲって……僕のこと？」

「がつくりとうなだれている。うん、俺も落ち込みたい気分だなあ、いくらあんまり冒険に出ていないとはいえ、名前覚えられていないほどルイーヂの影が薄かったなんてさ。これも後でクッパによく念を押しておこう。」

「ほら、いつまでもいじけてねーで、行くぞー」

「うつつ」

ぐすんと鼻をすすり、体育座りしていたルイーヂが立ち上がる。俺もそれに続いた。

クツパの手下の仕事を手伝ったりしながら、デッキへ上がる階段までたどり着いた俺たち。

まず最初に目に飛び込んできたのは、通路を占領しているでっかいタルだった。

「誰だ？ こんなところに荷物を置いたのは！ これじゃあデッキに出られないぞ！」

手下のノコノコが困ってる。うーん、こんなにでっかいの、俺たちのジャンプでもとびこせそうにないし。壊したらクツパにすごく怒られそうな気がする。とは言え、俺たちもデッキに行かなきゃいけないしなあ。

二人で頭をひねって考えていると、ふと。視線の端に、ブロックがあるのを見つけた。

好奇心に導かれ、軽くジャンプしてブロックを叩いてみる。すると、ブロックと連動して、クレーンがこっちに向かって動き出した！ おお、ひよっとしてこれなら行けるか？ わくわくして、俺たちはクレーンの動きを見守った。

すると、クレーンがルイージの頭上で、いきなりぴたっと止まってしまったんだ。

「あれ？」

「おかしいな、故障か？」

もう一度ブロックを叩いてみようかと思った、その時！

クレーンが突然動き出し、ルイージの頭にがっしりとかみついた！ って、生き物とは違うが。

「おわ！？」

「うわ、わあーっ！！」

ばたばた暴れるルイージをものともせず、クレーンはそのままでツキのほうに行ってしまった。あっちゃー……。

「あゝあ、荷物と間違えて連れてっちゃったみたいだな。せつかくだから、監視係にでもするか……」

せつかくだからって何だよオイ。

デッキに上って来てすぐ、俺は弟の件についてクッパの説得を試みる。

「なるほど、我輩の勘違いだったか。仕方ない、緑のヒゲは一日入団ということにでもしておくか……」

「いや、だから『緑のヒゲ』じゃないっての」

「やかましい！ 類似だろうが緑のヒゲだろうが同じことだ」

失敬な。俺の弟に向かってなんつー事を。

文句の一つでも言ってやろうかと口を開きかけた時、いきなり俺たちの間にノコノコが割り込んできた。

「クッパ様！ もうすぐ、キノコ王国とマメーリア王国の国境付近を通過致します！」

「うむ、御苦労。下がっていいぞ」

クッパの言葉に応えるように、びしっと敬礼を一つして、ノコノコは足早にその場を立ち去った。

うーむ……ここだけ見ると、こいつが手下たちにどれだけ信頼されてるかってのが分かるなあ。ちよつと複雑だが。

と、その時。

「う、うわああ！？」

俺たちの頭上で、クレーンにぶら下がって双眼鏡をのぞいていたルイージが、突然騒ぎだしたんだ。

ひどく慌ててる。なんだなんだ？

「ルイージ？」

「むむむ？ 何をそんなに騒いでいるのだ」

「む、向こうから何か変なものがっ」

ルイージが言い終わるより速く。

どこからともなく緑色の球が飛んで来て、それがカメジェットに直撃した！

「うわっ！」

その衝撃でクツパが転んで、ルイージがクレーンから落ちる。…  
あ、クツパ踏まれた。

「な、なんだ！ 何が起こったのだ！？」

「分からないよ、突然……」

「……むうっ！！」

困惑する俺たちを前に、クツパが何かに気がついた！ デッキの  
突端のほうを睨みつけている。何か見つけたのか？

……ん？

空の向こうから、何かが飛んでくる！

気味の悪い緑の顔をした二人組。片方は、空飛ぶ椅子に乗った婆  
さん。もう片方は、妙なヘルメットをかぶったメガネ男。

……雰囲気で、分かる。

ふたりとも、クツパなんかよりもずっとタチの悪い、すつつ  
げえ悪い奴！

そいつは俺たちの目の前で止まると、「ゲヒヤヒヤヒヤ！！」つ  
て、耳障りな嫌な声で笑って、言ったんだ。

「このゲラゲモーナ様に追いつこうなんて、1000000000年  
早いんじゃない！」

なんだって？

その口ぶりからすると……まさか！！

「お前が、ピーチ姫の声を盗んだ犯人だな！」

「ゲヒヤヒヤヒヤ！ その通り！！」

「「なっ！？」」

クツパの言葉に、悪びれることなく堂々とそいつは言った。……  
やっぱり！！

こいつがこの騒ぎの張本人。俺たちのお守りするべき姫をあんな  
不自由な目にあわせて……くそっ、許せないっ！！

怒りのあまり、言い返すのも忘れてただ唸っている俺たちに向か

つて、ゲラゲモーナは勝ち誇ったようにげらげらと笑った。

「さっそくマメーリアに帰って次の作戦を開始するんじゃ！ お前たちの相手をしている暇はなーいっ！」

そう一気にまくしたてると、ゲラゲモーナはくるりと後ろを振り返って。

「ゲラコビッツ！ やっておしまいー！」

彼女の後ろで、何も言わずにただニヤニヤしていたメガネにそう命じ、夜空の向こうに飛び去ってしまった！

「ンガア〜！ 待て〜っ！！」

クツパが吼えるも、ゲラゲモーナの姿はもうそこにはなく。

代わりに、その場に残されたメガネ男だけが、ゲラゲモーナそっくりの下品な声で高笑いした。

「ワレはゲラゲモーナ様の一番弟子、ゲラコビッツである！」

ピーチ姫の声を盗まれたぐらいで追いかけてくるなんて、暇るるね

！」

「『ぐらい』だと！？ ふざけんなー！」

「……っ」

こんなの挑発だつてぐらい、俺にもルイージにも分かつてる。でも怒りがおさまらない！

事件が起きてすぐ、犯人に思いつきりバカにされるなんて！

「そんなに怒らなくても、これからもつと恐ろしい事が起こるよ！」

「恐ろしい事？ ……『計画』とかなんとか言ってたし。姫の声なんか盗んで何をしようとしてるんだっ！」

「ゲヒヤヒヤヒヤ、そんなの教えないるよ！ とりあえず、お前たちはここで消えてもらうるよー！」

ルイージの言葉に、のらりくらりとそう答えたメガネ男……ゲラコビッツのかぶっていた、掃除機をくつつけたようなみょうちくりんなヘルメット。それが、彼の言葉と共にいきなり動き出した。

掃除機のノズル部分から飛び出したのは、さっきカメジエットに



ぶち当たった緑の球！

俺たちが構えるより早く、それは俺たちの両脇をすり抜けて、クツパを吹っ飛ばした！

「ぐわああっ！！」

「クツパ！？」

慌てて俺たちはクツパに駆け寄った。……なんてひどい傷。たった一発でこれほどの威力があるなんて！ くそ、よくも！

一矢報いてやろうと振り返ったが……いない。どこ行っただ！？

「ゲヒヤヒヤヒヤ！！」

いきなり背後から響いたゲラコビッツの笑い声。いつの間にか後ろに回り込んだのか！？

「次はお前たちの番である！！」

まだ国境すら越えてないのに、こんなところで負けてたまるかさっさと片付けるっ！！

正直言つと……俺たちは苦戦していた。

あいつの攻撃中の癖を見抜いたクツパのアドバイスも受けたが……

……それでも、どうしても決定打は与えられない。

どうにかヘルメットを踏み壊しても。あいつが「いらっしやうい！」と唱えるたびに、すぐにどこからともなく新しいヘルメットが

あらわれる！

それでも諦めずに、俺たちは何度もあいつに攻撃を加えていた。

と、その時。またしても、ゲラコビッツが「ゲヒヤヒヤヒヤ！！」と笑いだした。

「な、何がおかしいんだよめえ！」

「もう充分なのである！ こんなところで道草食ってる暇はないのである！」

「えっ！？ そ、それって……」

ルイージが言い終わるより早く、ゲラコビッツは空高く飛びあがって、そして……

「一気に片付けるーるるっ!!」

甲高い叫び声とともに、大量の攻撃弾を船にばらまいた!

「うわあああっ!!」

慌てて俺たちは船の上を駆けまわる。直撃は免れたが……やばいぞ、このままじゃ!

船の中からも、手下たちの悲鳴が次々と聞こえてくる。

「ゲヒヤヒヤヒヤ!!」

そんな俺たちの姿を面白がるみたいに、最後に笑い声を一つ残して。

ゲラコビツツは、ゲラゲモーナを追いかけて、夜空の向こうに飛び去って行ってしまったんだ。

「あ、くそっ、待ちやがれこの野郎!! 声を返せ!!」

「駄目だよ兄さん、間に合わない! ……って、うわー!!」

爆発がどんどん激しくなる。

辺りが真っ白になって、俺たちは星くずのまたたく夜空に投げ出されたんだ……。

### 第3話 犯人現る！【Mario Side】（後書き）

マリオ視点。

前回まで間をあけていた行間を詰めてみました。

どっちが読みやすいかな？

#### 第4話 大魔王・ホッスイー 【Luigi Side】

「う、ううゝん」

気がつくと、僕は地面の上に投げ出されていた。夜空のような紫色の地面の上で、色とりどりの星型の石がぴかぴか光って、とつても幻想的な場所。ここが、キノコ王国とマメーリア王国の国境にある平原、星くずヶ原……。

近くには、キノコ型のランプがついた橋と、崖にへだたれた緑色の大きな建物。建物の反対側に見えるのは、緑色で顔のような形をしたランプの橋。ちょうどここらが国境のすぐそばみたいだね。

あ、そうだ！ 兄さんやクツパは！？

ボクは急いで起き上って、あたりをきよろきよろと見まわしながら、叫んだ。

「兄さん！ クツパー！！ …… って、ああっ！」

地面に埋まつてる、見なれたオーバーオールと赤いシャツ…… 兄さんだっ！ ボクは慌てて兄さんの傍に駆け寄った。

「に、兄さん大丈夫！？」

「……」

返事はなかった。…… よく考えたら当たり前だけど。

「今出してあげるからね！ セーの、んゝっ」

兄さんの足を掴んで、力を込めて思いっきり引つ張る！ 数回その動作を繰り返すと、すっぽりと兄さんの体が地面からひっこ抜けた！ その勢いで、ボクは仰向けに倒れこんでしまった。

あれ。兄さんがいない？

「あらよつと！」

「むぎゅっ」

「ん？ 今ルイージに助けられたような…… わ、地面が揺れてる」  
思いっきり踏んづけといて、ひどいや兄さん……。

兄さんを弾き飛ばすように、ボクはどうにか自分の力で地中から

飛び出した。

「うわ！……なんだ、そこにいたのか」

「いたのかって……まあお互い無事だからいいけどね」

「あれ、クツパはいないのか？」

「うん、ボクが見たのは兄さんだけ……あ！」

兄さんにそう聞かれて、もう一度確認しようと周囲を見回したボクの目に飛び込んできたのは、倒れている数人のクツパの手下たちだった。ボクたちは慌てて駆け寄った。

「大丈夫か！？」

「か、カメジエットの……ローンの返済が、まだ、なの、に……」

全身ボロボロになりながら、息も絶え絶えに、喉から絞り出すようにそう言うノコノコ。ローンって……. . . . . どんだけコインつき込んで作っただ、って言うのが分かるなあ。ゲラコビッツのせいで粉々に吹っ飛んじゃったし、これはお気の毒としか言えないなあ…….

……. . . . . って、クツパ軍団の事情はどうでもよくてっ.

「クツパは？ 誰が見なかった？」

「……く、クツパ様は国境の向こう側へ落っこちてしまわれた……」

「クツパ様を見つけ……お……助け、しろ……」

ボクたちにそう教えてくれた他のノコノコたちも、全身傷だらけでなんだかとても苦しそうだつた。だ、大丈夫かな？

「国境の向こう側……分かったよ。きっとボクたちが探し出すから」

「……オレたちが助けなくなつて、あいつなら大丈夫だろー。あいつ、ゴキブリ並みの生命力なんだから。一応探しいてやるけどさ」

兄さん、それってクツパのことすつごく信頼とか心配してるように聞こえるよ…….

「まあ……そうだけど。でも、クツパはともかくこの人たちがほつといて大丈夫？」

「さっきの理屈で言えば、クツパの手下であるこいつらだつて平気だつて。見た感じ、命にかかわるような大けがでもないしさ。後はこいつらで何とかするさ」

「……そう、だね」

兄さんは数多くの副業のひとつで、お医者さんをやってる。その兄さんがそんな風に言うんだから……大丈夫、なのかな？ 本職は配管工なんだけど、いつつもピーチ姫のためにあちこち動いてるせいで、忘れられがちなんだよねえ。

「とりあえず……まずは国境を越えないと」

「そうだな」

こんなところで話し込んでいてもしょうがない。ひとまず、ボクたちは近くの建物へ向かうことにした。

入国手続きは、縄跳びみたいなゲーム感覚のものだった。でもボクたちはジャンプするのが仕事みたいなもの。難なくクリア！ 地図までもらっちゃったし、言うことなし。ピーチ姫を助けるための準備は万全！ でも、その前にまずはクツパを探さなきゃ。

それにしても、ここは色とりどりの星くずがきらきら光って、とってもきれいな場所だなあ。兄さんは、他の場所でもこんな光景を見ていたのだろうか？

「……ん、おい！ あれ見ろよ」

突然、先頭を歩いていった兄さんが声を上げた。何だろう？

「え、何？ ……あつ」

近くの高台に置いてあったのは、クツパの城とかで見るよりちょっとぴりサイズが小さい大砲。それに……クツパがはまってる！？

うわ、大変だ！ 慌ててボクたちは大砲の傍に駆け寄った。

「それ！」

兄さんがジャンプして、大砲をぐるりとひっくり返す。大砲の口から、いつも通りの怖い顔がひょっこりとのぞいていた。やっぱりクツパだ！

「だ……大丈夫？」

「おおっ！ マリオ！ いいところに来たぞ！ は、早く我輩をここから出すのだ！」

「んなこと言っただってなあ……」

兄さんが困ってる。ボクも困る。クツパみたいな巨体を、体にがつちりフィットしてる大砲から引っぱ張り出すなんて力、ボクにも兄さんにもないしなあ……。さすがに点火するわけにはいかないし。二人して頭をひねっていた、その時。

「ケケケケケケケ！！」

甲高い笑い声と共に、突然何かが空から降ってきた！！ て、敵！？

身構えたボクたちの前でケラケラ笑っているのは、クツパと同じくらいの巨体をした、緑の体に赤いトサカのなんだか妙な生き物だった。

ひとしきり笑うと、妙な生き物は、馬鹿にするような口調で言った。

「大魔王クツパともあるう者が大砲の中に落っこちるなんて、なんてザマだい！！」

「き、貴様何者だあ！？」

「ケケケケケケケ！！ ワシはこの星くずヶ原の大魔王、ホッスイ様だ！」

クツパ以外にも大魔王なんていたんだあ……。見た目は結構弱そうだけど。

「お前の噂は聞いているが、大したことないではないか！ ケケケケケケケ！！」

大砲にはまったその姿を見ながら、おかしそくに笑ってる。クツパのほうは……。カンカンに怒ってる。

「ケケケケケ！ もしそこから出して欲しかったら、ワシにコインを渡すんだな！ コインを全部渡せば自由になれるゾ！ この恥ずかしい出来事も、秘密にしておいてやるゾ！」

うわ、交換条件にコインを出してくるなんて！ がめつい奴だな

あ。

「……く、悔しいぞ 悔しいぞ！」

「大魔王のくせに泣くなよ、もー」

あーあ、悔し泣きしちゃったよ。兄さんが呆れてる。

コインかあ…… 具体的にいくらぐらい必要なんだろう。場合によっては、キノコ王国に引き返さなきゃダメかな？

と、思った時。兄さんが、懷からずっしりしたコイン袋をとりだした。え、それって……！

「なあ、これ全部じゃ駄目か？」

「なに？」

ホッスィーが目を丸くしてる。ボクはもつとびくりしたけど！

「ええっ！ 兄さん、それキノじいから貰った旅費……！」

「大丈夫大丈夫、またすぐ溜まるって」

もー、また考えなしに行動するんだから、兄さんってば。でも、困った人を見て放っておけないのは仕方ないよね。ボクもそうなの。

すると、今まで食い入るように袋の中身を見ていたホッスィーが、突然笑い出したんだ。い、嫌な予感……。

「ケケケケケケケ！ こりゃ、キノコ王国のキノココインじゃねえか！ ここはマメーリア王国だぜ！ 外国のコインは両替しないとな！」

「え。マジで？」

兄さんが固まってる。

懷から電卓を取り出して、ホッスィーはなんだか楽しそうに計算を始めた。

「えー本日の為替かわせレートでは、キノココイン100枚はマメーリアコイン10枚ナリ」

「ええっ！？」

「たった10分の一かよ！？」

「たったコイン10枚なら、この秘密をすっかりバラしちゃうかも



ナリ」。ケケケ」

え、クツパの秘密のほうが大事なのかなあ。ボクたちにとっては、他にも色々大事なことがある。このまま足止めされちゃ、ゲラゲモーナたちがまた動き出すかもしれない。それに、今頃キノコ王国はどうなってるんだろう……。

ボクとしてはコイン10枚で押し切りたいところなんだけど、ボクたちのすぐ隣で涙ちよちよ切れてるクツパを見ると、このまま知らんぷりするのは出来ないよねえ。そしてそう思ってるのは兄さんも同じみたいで、クツパとホツスイを代わる代わる見ながら「うーむ」って唸っていた。

そんなボクたちの考えを、そのまんま見透かしたみたいに。

「……ということで、マメーリアコインをあと100枚!! この星くずヶ原で集めて来たら、クツパを助けてやる!」

そう言つて、星くずヶ原の奥地へ繋がる橋を出現させた。

「……仕方ない。急ぐぞ、ルイージ! モンスターどもから、片っぱしからぶんどる!」

「う、うん。ブロックに入ってるのも忘れないでね……」

急いで、ボクたちは今来た道を引き返したんだ……。

コイン集めは、驚くほど順調に進んだ。

星くずヶ原に住む不思議な二人組・星かげ兄弟から、とっても便利な技を覚えてくれたんだ! これで、この地方の旅もぐつと楽になるよね!

またずっしり重くなったコイン袋を抱えて、ボクたちはホツスイのもとに戻つて来た。

「これでいいか?」

「ケケケケ? ふふーん、やるじゃねえか! それじゃ、100枚と言わずコイン全部貰うぜ!」

「は、早くここから出すのだ」

よっぽど待ちくたびれたらしい。またクツパが泣き出した。兄さ

んの手前、大魔王としてのプライド捨てちゃ色々まずいんじゃないかなあ……かつこ悪い。

そんなクツパの叫びを聞いて。ホッスィーは、にやけた目玉をまん丸くして、こう言つてのけたんだ。

「え？　そこから出す？　お前を助ける？　なんのことだい？」

「「んな……っ」」

うわ、そんな堂々としらばっくれるなんて！　最初から、クツパをダシにボクたちにコイン集めさせるつもりだったんだ！　なんてずる賢い奴だろう。ボクも兄さんもあいた口がふさがらなかった。だらしなく垂れ下がっていたクツパの目が、一気に釣り上った。

「騙しやがったなあゝ！！」

「ケケケケケケ！！」

おかしそうにいつもの調子でげらげら笑うと、ホッスィーはボクたちの目の前まで飛んできた。体がさつきより膨らんでるように見える。それに……なんだか殺気みたいなものも感じる！　戦うのか！？

「ここはもうキノコ王国じゃねえんだ！　よそ者はとっとと消えな！！」

「……そうはいかないよ。ボクたちは、この国でやらなきゃいけないことがあるんだ！」

「おう、そういうこつた！　そこどきな、この守銭奴大魔王！」

戦いは始まった。

まだ入国したばかりだって言うのに、こんなところで道草食つてる場合じゃない。

早く片付けて、ゲラゲモーナを追いかけてくちやね！！

自ら「大魔王」と名乗るだけあって、ホッスィーはなかなかの強敵だった。もうちょっと戦いが長引いていたら危なかったかも。

でも！　こつちだつてちょっとだけ強くなってる！

星かげ兄弟に教わった必殺技が、こつちにはあるんだからね！

「行くぜ、ルイージ！」

「うん！……ブラザーアタック！」

「スプラッシュ・ブロス！」

ボクと兄さん、二人分の体重を乗せた体当たり！　ホッスイーの体が軽々吹っ飛んだ。やったかな！？

と、思ったその時。

「さっきからゴチャゴチャとうるさいであります！」

うわ、いきなり地面の下から声がした！？　そういえば大砲の傍に、星くずヶ原でよく見る星型のハッチがあつたよね？

二人で顔を見合わせていると、思ったとおり。ハッチの蓋が開いて、星かげ兄弟の緑のほう、星かげ軍曹が現れた。歯ざしりしてるし、足をタンタンやってるし……ものすごく怒ってる？

怒り心頭って感じの星かげ軍曹は、クツパがはまっている大砲を横倒しにして、手に持っていた葉巻を使って……大砲の導火線に点火した！？

「ヒエ~~~~~~~~っ！！」

「うわ、ちょ、やべ！　おい待てて！！」

「ちよつと、ほほほ、星かげ軍曹！」

ボクたちの叫びはむなく、星かげ軍曹はさつさとハッチの下に戻ってしまった。……うわ、この導火線の短さじゃ、もう！

「ま、マリオ~~~~！　緑のヒゲ~~~~！　ピーチ姫の声を、必ず取り戻すのだ~~~~！　後は任せたぞ~~~~っ！！」

という、涙交じりの叫び声と共に。大砲から発射されたクツパは、倒れていたホッスイーを吹っ飛ばして、星くずヶ原の向こうへ飛んでってしまった。……って、だからボクは『緑のヒゲ』じゃないってば！！

「……あちゃー。さすがのクツパでも、あれはやバいだろ」

「ど、どうしよう。助けに行ったほうがいいのかな？」

「うーん……いや。今は先を急ぐべきだな。さっきお前も言っただろ。『この国でやらなきゃいけないことがある』ってさ」

……あ。

そういえば、ホッスィーと戦う前にそう言った気がする。

「でも、だからって」

「いいんだよ。あいつもオレたちに任せてくれたんだし」

そう……なのかな？

でもまあ、いいか。これで、ようやく星くずヶ原を抜けられそうだしね。

ようやく冒険がはじまるんだ！

手掛かり、早く見つかるといいね。兄さん！

「さっきのあれ、かつこよかったぜ」

「え……へへへ。ありがとう」

#### 第4話 大魔王・ホッスイー 【Luigi Side】（後書き）

今まで漢字だったマリオ・ルイージの一人称をカタカナにしてみました。変換がめんどくさいですが（オイ）、これはこれでいいかも。

さてさて、星くずヶ原編・ルイージ視点です。

もしあそこで戦闘にならなければ、ふたりは延々とコインを集めさせられる羽目になっていたのでしょうか……w

ちなみに『副業のお医者さん』 〃 『ドクターマリオ』です。  
分かる人いるかな？w

第5話 ウフ村、足止め、ハンマー兄弟 【Mario Side】

「うわああ……!!」

洞窟を出た瞬間、ルイージが感嘆の声を上げた。

うん、その気持ちは分かるぞ弟よ！ オレも、喉の奥からそんな声が出なかったからな！

ここは、山に囲まれた静かな所なんだが……それよりも目を引くのは、山の上からごうごうと流れる滝だった。

流れ落ちる滝の水しぶきに、いつの間にか昇っていた太陽の光が当たって、きらきら輝いて。

なんというか……豪快だけど、美しい……っていうのかな？ オレにはこういう芸術的な感性はないけれど、この景色はすごくきれいなものだっていうことぐらいは、すぐよく分かる！

しばらく、その景色に見とれながら歩いていた時だった。

「くせものだー!!」

「へ!?」

切羽詰まった怒鳴り声で我に返ったオレたちが、声のした方を見ていると。

鎧を着込んだ人たちが、凄い形相でこっちに向かって走ってくるじゃないかっ！

彼らはあるという間にオレたちを取り囲むと、すごい勢いでオレたちに迫ってきたんだ。

「つ、ついに見つけたぞ！ マメック王子をどこにやった!?」

「お前たちが、我が国のマメック王子を連れ去ったに違いない!」

「目撃者もいるんだ！ 素直に白状せい!!」

「ええ!?」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ!」

慌ててオレたちは声を荒げた。

マメックとかいうのが誰だか知らないけど、何が何だか分からない

いうちに誘拐犯になんかされてたまるか！

「オレたちはキノコ王国のマリオとルイージだぞ！　オレたちが誘拐なんかするわけないだろ！」

「それにボクたち、ついさっきマメーリア王国に来たばかりなんですよ！」

「何だと？」

鎧の人が眉をひそめる。……けど、その顔はすぐに元通りの怖い顔に戻って。

「嘘をつけ！　キノコ王国のスーパースターが、こんなところにいるはずがない！」

「いや、だから本当だったの！」

うーん、駄目か。こつちの話を聞く気はなさそうだ。

こつちも無駄なバトルはしたくない。最終手段、自慢の華麗なジヤンプでも見せてみるか？　と思つた時だった。

突然空のほうから、バサバサバサ、と、何かが飛んでくる音がしたんだ。見上げて……びっくり！　ホッスイーじゃないか！？……オレたちが痛めつけたせいで、体じゅうに包帯ぐるぐる巻きの痛々しい姿だったが。

「ケケ　ケケ　ケ……そいつら、嘘ついてないぞ……」

「何？」

「なんでも、ゲラゲモーナという奴を追いかけて来たそうだ……。見かけより強いぞ……」

つて、何で知ってるんだこいつ。オレたち、あいつと戦ってる最中にそんな事言つたわけ？

星くずヶ原の方角へ飛び去って行つたホッスイーを見送つた後、再びオレたちに向き直つた兵士たちは、さっきまでの緊張した表情がとれていた。

「……こ、これはこれは。失礼致しました」

お、その口ぶりからすると、疑いは晴れたな。よかったよかった。実は、この国のマメック王子が何者かに連れ去られたらしい……

という連絡が、この先の『ウフ村』からありまして……犯人の手掛かりを探していたのであります」

なるほどな。それで、見なれないオレたちを真っ先に疑ったわけだ。

ん？ そういえば。

「さつき、目撃者がいるって言ってたよな？」

「あ、そうだね。あの、どんな人だったか聞いてますか？」

「ああ、はい。目撃者によると、マメツク王子を連れ去った犯人は……」

「変なヘルメットをかぶって、「るるる」と喋るヤツ……らしいです」

……ん？

それってまさか、もしかして！！

「何か気がついたことがあったら、我々に知らせて下さい」

「調査再開！！」

「あ、ちよつと……！！」

オレたちが止める暇もなく、兵士たちは村のあちこちに散ってしまった。……あっちゃー、すごい手がかり、オレたち持ってんのに！

「あの人たちが言ってる犯人って……間違いなくゲラコビッツのこ  
とだよな」

「ああ。今のところ、あいつしか当てはまらないな」

「あの人たちで、捕まえられるのかな？ クツパですら敵<sup>かな</sup>わなかったのに……」

「……うーん」

ルイージの言ってることは、まあ、正しい。いつつモボコボコに  
してるオレが言うのもなんだが、自ら『大魔王』と名乗るだけあつ  
て、クツパの实力は本物だ。そんなクツパを一発でブツ飛ばしたゲ



ラコビッツを、彼らが捕まえられる可能性は……残念ながら、低い。仕方ない！ こうなったらオレたちでとっ捕まえて、ゲラゲモナの居場所を吐かせて、王子も返してもらっしかないか！

「とにかく、村に行こうぜ！」

「うん、そうだね！」

村人の話によると、マメック王子が連れ去られたのは、この村がある「ウフマウンテン」の頂上付近が怪しいらしい。でも、そのウフマウンテン頂上につれて行ってくれるっていう翼竜・プスラノドンが、最近なかなか帰って来ないらしいんだ。

「だったら自力で登るしかない！ と登山道のほうに行ってみたら……橋が修理中だった。……タイミング悪すぎないかオレたち？」

その橋の近くには、双子のハンマー職人も住んでるらしいが……今は家にいなかった。さあ、どうしたものか？ 途方に暮れて、オレたちは下山道付近をさ迷っていたんだ。

その時だった！

「マ、マメック王子を返せー！！！」

「……！」

悲鳴に近い叫び声がして、オレたちは反射的にそっちに向かって走り出す！

「……あれは！」

「げ、ゲラコビッツ！？」

兵士の声になんか耳も貸さず、彼と向かい合っていたゲラコビッツは……オレたちを散々な目に遭わせたあの緑の攻撃弾で、兵士を容赦なくブツ飛ばした！

おかしそくに笑ってる……。くそ！ なんて奴だ！

「なんて酷いことを……」

「くっ……おい！ ゲラコビッツー！！」

「ん？ ……んげー！！」

オレの声に反応して、ゲラコビッツが振り返った。オレたちの顔

を見た途端、ひどく驚いてる。ふふん、ざまあみる。

「お、お前たち！ クッパと一緒に吹き飛んだはずるる！」

「へへん。残念ながらこの通り元気だぜ」

「ふ、ふーむ……ワレがマメック王子で手こずっていた隙に、すっかり追いつかれたるね！」

やっぱり！

マメック王子をさらったのは、こいつだったんだな！

「ふるるるるるる！ しかしゲラゲモーナ様は、マメーリア城ですでに次の作戦開始中るる！」

「何だつて！？」

「どうせお前たちは間に合わないるけど、念の為……」

そこまで言つて、突然ゲラコビッツは空高く飛び上がった！ 来るか？ それとも逃げる！？

身構えたオレたちの頭上に、ふっと大きな影が差して……

「ここで足止めるるよーっ！！」

「なっ……兄さん、上っ！！」

「え？ ……って、うわあっ！？」

ルイージの声で、反射的にオレは後ろへ飛ぶ。……そこへ！ いきなり、自分の身長なんか目じゃないほどでかい岩が振ってきたんだ！！

下山道が完全に塞がれてる。このままじゃ、ゲラゲモーナがいるっていうマメーリア城には行けないじゃないか！ くっそー、よくも！

「ふるるるるるる！ この岩がある限り、お前たちはこの山から下りられないるる！」

その声を最後に、岩越しにジェット噴射の音が聞こえた。空の彼方へゲラコビッツが飛び去って行くのが小さく見えた。……逃げられたか、くそ！

「ど、どうしよう……先越されちゃったよ」

「あークソ、家からハンマー持ってくればよかったっ！」

「家飛び出したの突然だったし、準備する暇なかったもんねえ……  
ん？ ハンマー？」

「どうした？」

お、オレの言ったことになんか問題でもあったのか？

しばらく考え込んでいたルイージが、突然ぱつと顔を上げて、オレに何だか嬉しそうに食いついてきたんだ。

「それだよ、兄さん！ ハンマーだよ！ さっき聞いたじゃないか、双子のハンマー職人がこの村に住んでるって！ もしかしたら、家にあるのよりいいもの貰えるかもしれないよ！ それでこの岩、壊せるんじゃないかな！」

「おお、その手があつたか！！」

なるほどな。さっすがオレの弟だ！

帰ってきてたらいいけどなあ。さっそく、オレたちは元来た道を引き返した。

「ごめんくださーい」

「お、お邪魔しまあす」

恐る恐る、家のノレンをくぐる。

お、いたいた！ 緑色の顔をした、頭でつかちの二人組。作業台に乗った丸っこい石を前にして、なんだか難しい顔をしている。……まずい時に来ちまったか？

「こ、これが最後の石だよ！ ハンマー兄弟の意地を見せるがよ！」

「一筋の望みを、この石にかけるだよ！」

気合を入れるようにそう言う二人の体が、突然ふわりと浮かびあがって。

突然、ふたりは自分の頭を使って、題の上の石をがんと叩き始めた！ こ、これがハンマー作りに必要な工程なのか？ 痛そうだなー。

その動作を何度か繰り返した後……作業台の上にあったのは、無残にも粉々になった石だった。……失敗したのか。

ふたりが、息を切らしながらがつくりと肩を落とす。

「やっぱりこんな石じゃ駄目がよ。もうハンマーは作れないがよ…」

…」

「ハアハアハアハア……ん？ おめーら、こんなところで何ボケーツと見てるだ？」

「え、あ！ 勝手に上がってすみません！」

慌てて、オレたちはふたりの側に駆け寄った。

「あの、色々あって……ハンマーを作ってほしいんですけど」

「ああ、あんた達が凄腕の職人だって聞いてさ」

「ん、何？ ハンマーを作ってほしい？」

緑の服のじいさんが、何だか疑わしげにこつちを見てる。いきなりこんなこと頼みに来て、さすがに疑うよなあ……っていうか、何でこつちに来てから、オレたち疑われっぱなしなんだよー！

と、その時。赤い服のじいさんが、何かに驚いたみたいに、小さくジャンプして言ったんだ。

「ほ！ オラ、こいつら知ってるだよ！ キノコ王国のマリオとルイーダがよ！ ジャンプとハンマーの達人がよ！」

「……あー、そうだよ！ そうだよ！ オラも思っただだよ！」  
おつ、良かった。信じてくれたみたいだな！ さっきの兵士も言うてたけど、オレたちって結構名前知られてるんだな。オレはただ、騒動に首突っ込んでただけだっていうのに。いくら隣国とは言え、ここ、キノコ王国からは結構離れてるはずなんだが。

と、ちよっぴり優越感に浸っていた時。緑のほうのじいさんが、首を傾げてオレたちに聞いてきたんだ。

「そんな有名人が、どうしてこげなところで、ハンマーが必要になつただ？」

「あー、それは……」

「あ、いや……事情は言わんでええがよ」

説明しようとしたオレを、赤いじいさんがさえぎった。

「理由は聞かぬーで、頼まれた物をきっちり作る。それがプロって

もんがよ」

「……そうだっただよ」

おお。なんかかつこいいなあ、そういう考え方。

「それじゃあ、作ってくれるんですか？」

「ああ……だとも、ハンマー作りの材料には、山の頂上にある『オホホブロック』っちゅう石が必要だよ。それが、突然プスラドンが戻ってこなくなったで、頂上に行けなくなっただよ！」

ああ、そう言えばそんな話、村人が言ってた気がするなあ。

「オホホブロックは固い石でよ、この石から作るハンマーならどんな固い物でも壊せるがよ！」

それそれ！　そういうものを求めてきたんだよな、オレたちは！　そのハンマーなら、下山道をふさいだあの岩だって、きつと壊せる！

でも、今はそのハンマーを作るための材料がないんだよな……。

「オホホブロック取りに山の上さ登りたいけどよ、ジャンプが上手くねえから無理だあ……」

なるほどな。それで、今持つてる石だけで、どうにか仕事しようとしてたんだ。でも、やっぱりそれは失敗に終わったと。

……うん！　こんな時こそ、オレたちマリオブラザーズの出番だよな――！

「ジャンプなら任せとけ！」

「ん？　ああ、そうか。オメーら、ジャンプのプロだったな」

「ちゅー事は、山の頂上さ行つて、オホホブロックを取つて来てくれるっちゅー事がや？」

「はい！　ボクたちに任せてください！」

おお、よく言ったルイージ！　考えてたことは同じだったんだな！　まあどっちにしても、山登りはするつもりだったんだ。何しろ、山の頂上はマメック王子が連れ去られたっていう方向らしいからな。それに、プスラドンとか言う恐竜も探してやらないと！

オレたちの言葉を聞いたハンマー兄弟の顔が、たちまち笑顔にな

った。

「それは助かるだよ！ オホホブロック取ってきてくれたら、特製ハンマーを作ってやるだよ！」

「持ちっ持たれっだよ！」

ハンマー兄弟、カナンとズツチの家を出ると、ちょうど橋の修理も終わっていた。

よし、さっそく登山開始だ！

見てろよー、ゲラコビッツ。絶対ハンマー手に入れて、あんな岩すぐに粉々にしてやるんだからな！！

第5話 ウフ村、足止め、ハンマー兄弟 【Mario Side】（後書き）

ウフ村編、マリオ視点です。

マリオの口調がどんどん不良になって行く……w

さてさて、次回はいよいよあの人が登場ですかね？

## 第6話 プスラノドンとマメック王子 【Luigi Side】

喋る石像みたいなのがけしかけて来た『試練』をどうにか乗り越え、ボクたちはついにウフマウンテンの頂上までやって来た。

近くに望遠鏡が設置されて、興味にひかれてボクはのぞいてみる。……うわあ、いい眺め！

星くずヶ原もよく見える。深い森、怪しげなお屋敷、南の島、氷の海……あ、緑の屋根の大きなお城も見える！ あれがマメーリア城かな？ ……ゲラゲモーナは、今頃あのお城の近くで、ゲラコビツツと一緒に何かろくでもない事を企んでいるんだろうか。

「おい、いつまでも見とれてないで。早くオホホブロック回収しようぜ」

「あつ……ごめん。そうだね」

兄さんの声ではっと我に返ったボクは、慌てて望遠鏡から目を離して、兄さんの傍に駆け寄る。

山の頂上は、大きな湖のようになっていた。あちこちに小さな川が出来ていて、崖の下まで流れ落ちている。あれが、ふもとの滝に繋がっているんだね。

で、その湖の真ん中には、小さな紫色の丸い石がいくつも積み重なって、小島が出来ていた。その石の一個一個に、楕<sup>だ</sup>円の丸い模様が3つあって、それはよく見ると人の笑顔のように見えた。……ああ、だから『オホホブロック』って言うんだね。よく見ると、表情も少しずつ違うみたい。面白いなあ。

でも、それより目を引くのが……小島の上にどーんと陣取るオホブロックの親玉？ っぽいでっかい岩と、その上でうつ伏せになっているオレンジ色の恐竜だったんだ。

……あれ？ そう言えば村で、何か気になる話を聞いたような……。

「ねえ兄さん……この恐竜、もしかして」



「ああ、オレもそう思ってた。んー……よく寝てるみたいだし、起きたら話を聞こうぜ」

そう言って、兄さんがオホホブロックの山のうちの一個を拾い上げようとした時だった。

「コラー……っ!!」

「うわっ!？」

いきなり耳をつんざくような怒鳴り声に襲われて、ボクたちは思わず飛びあがった。お、起きてたの!

「ここにある石は、とても珍しい『オホホブロック』という石ぞら! 勝手にオホホブロックを持って行くのは泥棒ぞら!」

「あつ、ご、ごめんなさいっ」

「い、いろいろ事情があつてさ、その」

慌てて弁解しようとするものの、恐竜の視線は険しいものだった。ウフ村に着いたところの一軒といい……この王国に来てから、ボクたち疑われっぱなしだよ。

とりあえず、起きたんならいろいろ話を聞かなくちゃ。村人の言った通りなら、きっとこの恐竜は……。

「えーと……ところで、お前誰? 名前は?」

「え? オラの名前?」

恐る恐る、といった感じで兄さんがそう尋ねる。まだ険しい表情は取れてないけど、恐竜は少し首をかしげながらも名乗ってくれた。「オラはプスラドンっていうぞら!」

やっぱり! ボクと兄さんは顔を見合わせ、頷きあう。

「村のみんなが心配してたぜ。お前がさっぱり戻ってこないからって」

「え? それは悪いことしたぞら!」

続けて兄さんがそう言くと、プスラドンは申し訳なさそうにそう言った。険しい表情は取れてる。……一応、信用してくれたのかな?

「マメック王子を見かけてここまで追いかけてきたら……ここに、

いつの間にかこんな大きな卵があったぞら！　びっくりぞら！」

そこで一旦言葉を切って、プスラノドンは今自分が座っている岩……じゃなくて卵を、自分の翼で撫でながらまた続けて言った。

「オラ、ここでこうして卵をずっと温めていたぞらよ！　もうすぐ中から何かが生まれるぞら！」

「……おいおい。こんな卵より王子の事のほうが重要なんじゃないのかよ」

「っていうか、これ卵なんだ。ボクにはおっきな岩の塊にしか見えないんだけど……」

呆れる兄さんに同意するようにそう呟いて、ボクは改めてプスラノドンが「卵」だというそれを見上げた。オホホブロックを更にゴツくしたような感じのその卵。中でぼんやりと赤い光を放っていて、どくどくと脈打つような音も聞こえる気がする。……なんと言うか、ものすごく怪しい。

大丈夫なのかなあ、と思ってた、その時！

いきなり、卵が大きく揺れ始めたんだ。衝撃波みたいなもので、近くににいるボクたちも思わずよろめいてしまう。

「うわ！？」

「おっ！　来たぞら！　生まれるぞら！」

「ちよ、そんないきなりっ」

卵の表面にばきばきとひびが入っていく。

やがて、卵の殻を思いつきり破って……中から出てきたのは。

「グギャー……ッ……！！」

プスラノドンよりももっとでっかい恐竜だったんだ！　吼える声も体格も、生まれたとは思えないほどすごい迫力で……や、やっぱり厄介な生き物の卵だったんじゃないかっ！

卵が割れた衝撃で、オホホブロックがいくつか滝の下に落ちていく。家に直撃とかしてなきゃいいけど……って、今心配しなきゃい

けないのはボクたち自身のほうだよおつ。

「な……っ」

「うわああっ、何これっ」

「びっくりどら！　とんでもない卵だったどら！！」

その時、恐竜が口をもごしながらプスラノドンがいる方を向いて……口から、炎をまとったオホホブロックを、プスラノドン目がけて吹き出した！

避ける暇もなく、ともにそれを喰らったプスラノドンは、空の彼方へ吹っ飛ばされて行く。

「ああっ、プスラノドンー！！」

「ったくしょーがねーなあいつはっ！」

ボクたちがプスラノドンの無事を確認する暇もなく、恐竜は卵の殻から飛び出して、ボクたちの目の前に着地。そしてもう一度「グギャー……ッ！！」と吼える。

ううっ、すごい声……！　耳がびりびりするっ。

「こりゃ本気でかからなきゃな。やるぞ、ルイージ！！」

「え、あ……分かったよっ！」

兄さんの合図で、ボクは慌てて戦闘の構えを取った。

恐竜が口から吐いてくる攻撃弾は厄介だったけど、こっちにだってブラザー・アタックっていう必殺技はある。勝てない相手じゃない！

それにあんな弾、カメジェットを墜落させたゲラコビッツのあれに比べたら、大した攻撃じゃない……よね？

「体当たり、行くよー！」

「よっしゃあ！　ブラザー・アタック！」

兄さんとしっかり手を取り合って、恐竜の頭目がけて突撃する！

「「バウンド・ブロスー！！」」

ボクたち兄弟の渾身の一撃をくらって、恐竜が悲鳴を上げた。そろそろ倒せるかな！？

と、思ったその時だった。突然、恐竜が大人しくなって……その体が虹色に輝き始めて。体の大きさも、戦っていた時とはまるで違う大きさまで縮んでいく！

やがて、光がおさまった時。

そこには、きれいな服に身を包んだ、金髪のちょっとハンサムな男の人が立っていたんだ。

「えっ、え……？」

「お、お前は……」

戸惑うボクたちをよそに、優雅に着地したその人は、「フッフ」と笑みを浮かべながら金髪をさらりとかき上げる。その仕草はきらきらとまぶしい金色の光を放って、そして……

「君たちのヒゲに乾杯！」

……うわあ、なんか気品があつて、すっごくかつこいい！……あれ？ 兄さん、何でそんな苦虫噛み潰したみたいな顔してるの？

「……胡散臭え」

ぼそりと呟いたのが聞こえた。……確かに、兄さんこういう人あんまり好きじゃなさそうだもんなあ。

その時、ばさばさと羽ばたく音が聞こえた。これはもしかして！「プスラノドン！ 無事だったんだね」

よかった。ボクたちが戦ってる間に、ちゃんとここまで戻ってこれたんだ！

ボクたちが安心していても構わず、ボクたちのほうを見て固まっていたプスラノドンが、やがて口を開いた。

「こ、この無駄に輝く人は……マメック王子どら！」

「ええっ！？」

そうなの！？ 何だかやけに気品がある人だと思ってたけど、よりによってあの行方不明になってたっていう王子様だったなんて！ ってことは、今までボクたち王子様と戦ってたんだ！ 完全に倒

さちやわなくって良かったあゝ。

「どうしてこんな事になったのだら!？」

「……フフフ」

もう一度髪をかき上げる仕草をして、王子は笑った。よく見ると、ホントにハンサムな人だなあ。

「まあ、いわゆるちよつとしたアクシデントってやつかな」

「あ、アクシデント……ですか？」

「ある秘密の任務で国中を調査していたところ……この山で、ゲラゲモーナとその手下のゲラコビッツに、バツタリ遭遇してしまつて……。気がついた時には時すでに遅し。あんな姿にされ、石の中に閉じ込められてしまつたのさ」

そこまで説明して、王子は髪をかき上げる仕草をもう一度して見せた。あ、やっぱり卵じゃなかったんだ。……隣で「いちいち光るなつっの」って兄さんが小声で毒づいてる……。

それにしても……この一件、やっぱりあの二人が絡んでたんだな。この国の王子様をあんな姿にするなんて……すごい力を持つてるんだ、ゲラゲモーナって。許せない奴だつてことには変わりないけど、いつか戦うことになったら……勝てるのかな、ボクたち。

でも、この国に住む悪い奴なら、私情で来てるボクたちならともかく、この人たちにとっても敵だよな！ なにしろ、この人は立派な被害者なんだから！

「あの。ボクたちも、ゲラゲモーナー味を追つてるんです！」

「そうなんだよ。実は……」

マメーリア王国の偉い人と会える、めつたにない機会だと思つて、ボクたちは、ボクたちの故郷で起こつた事の始まりを、王子に話して聞かせた。

「へえ……ピーチ姫の声が盗まれたのか」

「ええ、そうなんです。だから」

どうか協力して下さい、と続けようとした時。どこからともなく、ソラマメに羽が生えたような不思議な乗り物が飛んできて。

王子はそれに飛び乗ると、ちっちゃ、と指を振る仕草をして、自信満々といった顔つきで笑って見せた。

「フフフ……ピーチ姫の事なら、心配しなくても大丈夫さ」

「え？ いや、そういうわけにも……」

「とにかく、ゲラゲモーナの後を追うべきだね！」

それはもちろん、その通りなんだけど。

でも、どうしてそんなこと言うのかな。ボクも兄さんも、姫の事が心配だからこそ、こうしてここまで来たのに。なんだか、ボクたちの知らない事を色々知ってる気がする……。

「山を降りたら、マメーリア城にいるマメラ女王に会って来て欲しい。恐らく、ゲラゲモーナの次のターゲットは、マメーリア城にある！」

「！」

下山道を塞いだ時のゲラコビッツの言葉を、ボクはハッと思いだす。マメーリア城で次の作戦開始中とかどうとか……。

あの事が、王子の言葉に繋がるんだとしたら。もうあまり時間はないはずだ！ 早く山を下りないと！

そう思っ、兄さんに声をかけようとした時。

「ボクからのプレゼント。マメックのサイン入り」

そんな台詞と共に、ボクの目の前に何かが落ちてきた。……黄色いバラだ。花びらに、芸能人の書くサインっぽい宛名がきれいに書かれている。

「緑の君は、黄色いバラがよく似合うね。そのバラを見せれば、マメーリア城に入れるはずさ！」

えっ！？ そ、そんなこと言われるの初めてだよ。なんだか照れるなあ。

どう反応したらいいべきか困るボクと、そんなボクたちの様子を見て呆れたように顔をしかめている兄さんを、乗り物の上から見下

ろしながら。もう一度、髪をかきあげてきらきらした輝きを、ボクたちの頭に焼き付けるように放って。

「さて、ボクは任務に戻らねば……それでは、また後ほど！」

そう言い残して。王子は、空の彼方へ飛び去って行ったんだ。

しばらく、ボクも兄さんも言葉が出せなかった。

「……ほわ。びっくりしたー。手がかりいっぱい貰っちゃったね」

「ああ……オレも内心びっくりしたぜ。まさかこんな所で一国の王子に会えるなんてさ」

そう言う兄さんの視線は、ボクの手の中の黄色いバラに向けられていた。

「そいつがあれば城に入れるはずだよな。そうと決まれば、早く山を下りようぜ」

「うん。オホホブロック、カナンさんたちに持って帰ってあげなきゃ」

「そいつでハンマー作ってもらって、あんな岩イチコロだぜ！」

「あ、山を下りるどら？」

王子と戦う前に手に入れそこねたオホホブロックをもう一度拾い上げたボクたちに、プスラノドンが声をかけてきた。

え、何？ まだ何かあるのかな。

「長い道のりをまた下りてくのは結構大変どらよ！ オラの足につかまるどら。ウフ村まで運んであげるどらよ」

「おお！ いいのか？」

「わあ、ありがとう！」

やったね、それなら帰りは楽ちんだ！

これでプスラノドンもウフ村に帰れて、村の人たちに心配かけずに済むよね！

さあ、早くハンマーを手に入れよう。

そしたら、急いでマメーリア城に行かなくちゃ！ 手遅れにならないうちに！

## 第6話 プスラノドンとマメック王子 【Luigi Side】（後書き）

ウフマウンテン編、ルイージ視点。無駄に輝くあの人、マメック王子登場です。

ウフロスを楽しみにしていた方は申し訳ない。うだうだ長くなる事を考えカットしました。w

ゲーム中ではマリオもルイージもあまり喋ることはありませんが、王子との接点が特に高いのはルイージのほうなので、彼にとっての好印象を持たせてみました。

逆に、自分が書くマリオの性格だと、王子とはあまり相性良くなさそうだなあと思うっちゃったりします。w



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3716m/>

---

マリオ&ルイージRPG 兄弟の冒険日誌。

2010年10月8日10時30分発行